
真夏の海

沙樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の海

【Nコード】

N2841H

【作者名】

沙樹

【あらすじ】

彼女の秘密を知っていく梁。知れば知るほど辛くなる…。

ZERO.. はじまり

生暖かい湿気と気温が、俺を包む。

今朝、梅雨入りの告知をお天気キャスターが言っていた気がする。もう少ししたら、エアコンの室外機の騒音に頭を悩ませる季節がやってくるのか。

そう思うだけで俺は憂鬱な気分になっていく。

「いってきます。」

少し大きめの新品臭い制服を身にまとい、俺は気だるそうに家を出た。

朝だというのに蒸し暑い、とても地味な天気だった。

——登校初日。

俺は舞台の裏にいるような感覚に押しつぶされそうになっていた。

“新米役者”、そんな感じ。

辺りには、いろんな匂いの制服がたくさん歩いている。

今までどんな難しい舞台も成功させてきたであろう役者たちが、
うようよと集まって騒いでいる。

「もう慣れた」という余裕の雰囲気、胸がつまりそうになる。

そしていよいよ俺にスポットライトが向けられる――。

ちょっと待ってくれ！まだ台詞を覚えられていない…。

「ほら。早くしなさい。」

俺は舞台に案内された。

まるで見たことのない、新しい場所。

そしてどこか息苦しい、つまる感じ。

全員の視線が俺に向けられているのを、うつむいていてもわかった。
膝小僧が痙攣しだし、なかなか足が前に進まない。

そんな俺に気づいてくれたのか、案内人が何か黒板に書き始めた。
カカカッという音さえ、今はうっとうしく感じてしまう。

“ 長谷川 梁 ”

俺の名前。

「今日から転校して来た、長谷川だ。まだ引越してきたばかりだ
そうだから、みんな仲良くしてやってくれ。長谷川、挨拶。」

「あ……。」

中途半端な声が出て、俺な急に情けなくなった。

「はじめまして。長谷川梁です。どうも…」

その瞬間。何人かがざわつき始めた。

なんだよなんだよ！俺。なんか言ったか？

急にざわついた教室に驚き、膝小僧の痙攣がおさまる。

途端に、先生が異変に気づき、黒板にまた何か書き始めた。

梁にルビをふり、“リヨウだ。リヨウ。”とぶっきらぼうにいい、端の窓側の席を指差した。

「長谷川はあそこに座ってくれ。初日から一番後ろだなんて、お前。ラッキーだぞ。」

そういつて俺の背中をかるく叩いた。

なんだってんだよ、まったく。

とりあえず気を使ってくれたことに感謝し、かるく会釈して席まで歩いていった。

…痛い。何かが体中を突き刺す。

ちらちらとこちらを気にするもの。

はたまた宇宙人でも見たように、俺を眺めている奴。

同じ教室にいるのに、まるで俺だけ檻の中に閉じ込められたみたいな雰囲気。

俺は君たちにどのような見えているんだろう。

このHRが終われば、隣のクラスの友達に

「転校生来た！最初名前読めなかったし。顔？なんかありきたりー。」

などと喋るんだろうか。冗談じゃない。

新品の匂いを消したくて、机の角に制服を擦り合わせてみた。

消えるはずない匂いを嗅ぎながら、長谷川 梁^{りょう}と書かれた黒板を見つめていた。

膝小僧の痙攣は、さらにスピードを強めて、動き始めた。

ONE：出会い

湿ったHRが終わり、俺はカバンからペットボトル入りの水を取り出し、思い切り飲んだ。

勢いをつけすぎたせいで、口から水が跳ねて、服に付いてしまった。今すぐこのペットボトルをぶちまけて、制服を洗いたい。

ついでに、色落ちしていない真っ青なカバンも。

家に帰ったら漂白剤に付けて、色落ちさせてやろうか。

ふと隣を見ると、まるで俺には興味が無いと言うように、机に突っ伏して寝ている女子生徒がいた。

俺とは反対の向きに顔を向け、手はだらんと下に垂れ下がり、まるで自分の部屋のようなリラックス感でそいつは眠っていた。

教室の窓から風が吹くたびに、そいつの真っ黒なショートカットの髪が、ふわりと撫でられる。

細い足首がたまにピクンと動いている。

なんだか腹立つ。その余裕が。

「ねえ。」

俺はその女子生徒に声を掛けてみた。しかし何も反応が無い。

ひょっとして寝てるふりして、気を失っているんじゃないか。

もしそうだとしたらものすごい大きな声で「help me!」と叫んで助ける。

そうすれば俺は“人命救助が出来るすごい奴”という肩書きを持てるかもしれない。

そうしたらどうしよう。俺はレスキュー隊員にでもなろうか。

「ちょっと。」

はっとして我に帰ると、ちゃんと意識を持っている女子生徒がこっちを見ていた。

「さっきから話しかけているのに。全然気づかないんだから。」

少しハスキーがかった声でぶっきらぼうに彼女は言うど、俺をかく睨みつけた。

よく見ると、彼女はアンバランスだった。

瞳の色が灰色。カラーコンタクトを付けているわけでも無さそうだ。そしてしっかり整った鼻筋。

目の窪みは外国人みたいで、唇が薄い。
始めてみる顔のタイプだった。

ハーフか、はたまたクォーターなのか。
よくわからないけど不思議な感覚に陥った。

漫画の「NANA」の主人公の大崎ナナのような感じ。

中島美嘉もいいけれど、実写化するなら、彼女はもってこいだと、
俺は思った。

「君が転校生？なんか意外。こんな時期に転校してくるんだから、
すごい悪ガキだと思ってた。」

彼女はふうっと大きな息をつくと、髪をかきあげた。そして引き出しから下敷きを取り出し、大げさに仰ぎはじめた。

「寝汗。かいちゃって。」

途端に俺は急に恥ずかしくなった。

しぼられている雑巾のように、切なくなった。膝小僧の動きは止まらない。

「…まだ何も持っていないから、授業のとき教科書とか見せてほしい
んだけど。」

やっこの思いで振り出した言葉は、意外なほど定番的な言葉だった。

「…あたしのでよかったら、いくらでもどうぞ。基本全部置いていつてるから、忘れ物はないと思うよ。」

「ありがとう。早速一限目は何？」

「知らない。」

そう言うのと、また彼女は机に突っ伏して寝てしまった。

“知らない訳ないだろう！” そう叫びたかったが、また彼女に、迷惑そうに睨みつけられるのが嫌だったので、俺は無視して前を向いた。

なぜだろう。

俺はまだ此処に来て数時間しか経っていないのに、彼女の方が此処を知らない気がする。

一人壁を作り、誰にも邪魔されない空間を俺に邪魔された彼女は、どんな気持ちだろうか。

大好きなゲームをやっているときに、コンセントを引っこ抜かれた気分だろうか。

それでは俺だって腹が立つ。

それならもう喋りかけないようにしようか。触らぬ神に祟りなしの精神でいこう――。

「長谷川梁！」

突然声を掛けられ、思わず体がぐらついた。

フルネームでいきなり呼ばれるなんて初めての経験で、額に汗が伝わる。

声の主をみると、三人の男子が、俺を見て手招きしている。

隣の仏頂面にうんざりしていた俺は、逃げるようにそっちへ吸い寄せられていった。

輪を作って座っていた男子たちは俺が来たのを見て、間を開けるようにして、座り直した。

「さっきの挨拶、緊張してただろ（笑）」

茶髪のくしゃつとした顔の男子が、俺に話しかけてきた。

「そんなにだよ。」

十六歳の男児が緊張してたなんて、とても恥ずかしくて、小さな嘘をついた。

そういうと、彼らはあっさりと嘘に気づき、大笑いし始めた。

よく見ると、彼らは一人一人全然違う個性を持っていた、

今、俺に話しかけた奴は、茶色い髪をギャル男みたいにセットし、笑うと目尻にしわができる。

雑誌の読者モデルのなかにいそうな雰囲気男子。

もう一人は、黒髪短髪の健全な男子高生という感じ。

部活マンだろうか。肌がこんがり焼けている。

左耳のピアスは拡張されていて、穴が大きく見える。

最後は、なんだか猿みたいな男子。背がちっちゃくてすごくすばしっこそう。

「このギャル男が佐藤賢太郎。このサルが林明良。そいで俺が鈴村裕利。よろしく。」

びっくりするほど、俺が最初に抱いたイメージと重なって、すこし焦った。

佐藤賢太郎と林明良が必死で自分のイメージの撤回をしていた。

「俺は長谷川梁。ってか：みんな知ってるか。梁って呼んで。」

「俺らもみんな呼び捨てでいいから。サルはサルでいいけどね。」

「裕利！それひどい！」

「ところでさ、お前さっき隣と喋ってなかったか？」

急に声をひそめた賢太郎が俺に聞く。

全員が真剣な目になったので、俺はすこし後ずさりした。

「喋ったよ。でもあんまり相手にされなかったけど。」

やっぱりなー。と一同声がそろった。

どうして？と聞き始める前に、明良がぽつぽつと話し始めた。

「梁の隣、舞海まいみ 栞しおりっていう子なんだけど。なんかあんまり人を寄せ付けないんだ。俺ら三人小学校から同じで、舞海さんも同じなんだけど、表情が変わらないってゆうか……。これだけ一緒でも話したことあるのは裕利だけなんだよ。」

「でも、無理矢理話しかけてやっと答えてもらったのが“うん”だけだったぜ。」

「なかなか美人だし、好きになる奴も多かったんだけど、門前払い。まったく興味なしって感じで。」

三人は時折、寝ている女子生徒に目をやりながら、話し終えた。

驚いた。とゆうか、人の噂とは恐怖だ。

さっきまで名前も知らなかった人のイメージががらりと変わった。大崎ナナどころではない。

なんだか芸能人みたいな扱いで、本当に疎遠されているように感じた。

そして、俺は次の言葉に耳を疑った。

「そして決定的なのが、俺ら男子によく触ってくるんだよ。」

触る？

「なんだよそれ？触るってどういうこと？」

思わず笑ってしまった。違和感がありすぎる。男どころが、人間にも興味ない感じなのに。

「本当笑い事じゃないんだよ。俺も触られた。」

裕利が真剣な顔で、俺の笑いを止めた。

「俺は尻を撫でられた！」と賢太郎。

「俺なんかヤバイ所触られそうになったんだぞ！」と涙ぐむ明良。

後ろから羽交い絞めにされて…ともらす。

「とにかくだ。舞海さんには気をつけたほうがいいぞ。こんな調子だから、他の女子には“男好き”って思われてみんなから噂される。」

真剣な警告を聞いているうちに、なんだか違和感が沸いてきた。俺にはそんな素振りな見せなかったけどな…。

「そういえば、舞海さんってハーフかクォーターなの？」

「それが、俺たちもよくわかんないんだ。なにせ、謎が多い人だから。」

「梁、惚れるんじゃないぞ。」

「そんな噂を聞いてからじゃ、惚れるわけないだろう。」

確かに。と三人は笑った。

「てか俺、教科書借りる約束しちゃったよ。」

「うえー。やばいじゃん！キスされるかもよ。」

とふざける三人と同時に、一限目のベルが鳴り、慌てて自分の席に戻った。

三人はこっちを見てにやにや笑っている。

俺は“向こう向け”の視線を送ってから、噂の本人を見つめた。何も知らずにまだ寝ているようだった。

気づかれないようにカバンからペットボトルを取り出し、今度はこぼさないように慎重に飲んだ。

だが、隣の視線がこっちに向いているのに気づき、また服に飛び散らせてしまった。

TWO：会話

第二章

正直、焦った。

俺は濡れた制服などどうでもよくなり、猛スピードでペットボトルをカバンに押し込んだ。

さっきまで寝ていた隣の女子生徒は、これでもかという程、目を見開いて、こっちを見ている。

「…教科書。」

「へ？」

「見るんじゃないの？」

…ああ。そういうえば約束をしたんだった。

ぼうつとしている俺に痺れを切らしたのか、せっせと自分の机を俺に近づけてきた。

ガガガッ…ガッ…。

古い木材で出来た床の上を、全速力で走った時のような音が、狭い教室中に響き渡り、なんだか恥ずかしくなった。

黒板に答えを書きに行ったとき、キィーと爪で引っ掻いてしまい、クラス中の非難を浴びる。申し訳ない気持ちと嫌悪感。

今、その気分そのものだった。

ぴったりくっついた机は、中学生の時を思い出させ、なんだか羞恥心を生み出した。

教室に一人の教師が入り、では数学の授業を始める、とだけ言い、

黒板を向いた。

他の生徒たちは一斉にノートの教科書を開き、まるでサイボーグのように書き写し始めた。

途端に、この教室にはチョークの擦りあう音と、シャープペンシルが紙を通り越して、机にぶつかる音だけが響くようになった。

ノートの存在をすっかり忘れていた俺は、為す術が無く、ただぼう然と座っていた。

これじゃまるで部屋に置いてある人形みたいだ。

「ノートもないの？」

隣から声が聞こえてきて、横を見ると、机をくっつけたせいで距離が大分近づいていて、すこし驚いた。

よく見ると、舞海さんはとてもくつきりとした二重をしている。

本当に外国人みたいにしが見えなくなってきた。

だしたらフランス系のハーフだろうか？

「ノートも書くものも無いみたいね。これ、使って。」

という、すべての教材を俺に押し付けた。

「え？君の分は？」

なんとなく“舞海さん”というのが恥ずかしくて、君と呼んでしまった。

それも急に恥ずかしくなり、すぐ下を向いて、自分の足元を見つめていた。

「私はいいの。」

と、ぶっきらぼうに言ったかと思うと、また机に突っ伏して寝始めた。

――まったく。どれだけ寝れば気が済むんだ。

そう思いながらも、とりあえず借りた教材に感謝し、俺はノートが一番後ろのページを千切り始めた。

びりびり、という乾いた音が教室に響く。

誰にも気づかれないうちに千切りたかったが、ノートは音を出すのを止めない。

やっと千切り終えたノートは、切り口がガタガタになっていて、とても不恰好になっていた。

ふと隣を見てみると、寝ているはずの彼女は、大きな目を開けて、突っ伏しながらも、机になにか絵を描いていた。

眉間にはしわが寄り、机と顔の距離が近づきすぎて、目の焦点が合っていないように思える。何を描いているのか、俺は気になり、前を見て黒板をうつすフリをして、彼女の机を見た。

教室に、ふわりとした風が滑り込んでくる。

彼女の机には、どこかの海だろうか。

波打つ白浜と海。

そして、白いロングドレスを着た女の子が描かれていた。

落書きだというのに、はつきりと波打つ海が分かる。

よく見ると、女の子の目からは、一筋の涙が描かれている。

涙の先は、海へと繋がっている。

何か、切ない気持ちになった。

自転車でよそ見しているときに、人にぶつかりそうになって、慌ててハンドルとブレーキを切りかえす。

あの時のヒヤッとした感覚がした。

何か、見てはいけないうな…そんな気がした。

「これ、私のお姉さん。」

いきなり声をかけられて、それこそ車に轢かれそうになったときぐらい、びっくりした。

その場から飛び上がるかと思った。

俺はイラストに見入りすぎて、もはや彼女の机に顔をぴったりくっ

つけていた。

「お姉さんなんだ。どうして泣いているの？」

「私のお姉さん、結婚直前に婚約者に逃げられたの。他に好きな人が出来た、って。すごく見

てられないくらい辛そうだった。白いロングドレスを着たい、ってゆってた。結婚破棄されたとき、彼女はすぐ海にいったの。そして涙が枯れるまで泣いてた。まるで、海を自分が作ったかのように。あれは見えてられなかったな。」

「すごく残念だったんだね……。」

「お姉さん、っていつても、血は繋がってないけどね。」

「へ？」

彼女はにかっと笑って、目尻にしわを寄せた。

「あなた、その“へ？”っていう切り替えし、好き。なんかどんくさそうで面白い。」

はっ？なんだよソレ。

自分も気づかなかった長所を他人に褒められるのは、すごく不愉快だ。

まだ出会って間もない人なのに、こんなに早く見透かされて、なんだか本当に腹が立ってきた。

その時、膝に何か当たる気がした。

しかし、俺は怒りで気にしなかった。

「ごめんなさい。怒った？でもこの人は私のお姉さんみたいな立場の人だよ。」

「どういうこと？」

「あまり聞かないですよ。まだ私達、出会ったばかりじゃない。」

というと、彼女は筆箱を乱暴に開け、消しゴムを引っ張り出したかと思うと、おおげさに消し始めた。

ギュ…ギュと、不快な音が耳に突き刺す。

古い机だから支える足がすこし浮いていて、手の動きと同時に、机もガタンガタン揺れ始める。大粒の消しカスを乱暴に拭い去った彼女は、不機嫌そうに自分の爪の手入れをし出した。床にはここから見ても分かるほど、消しカスで埋め尽くされている。

彼女にとって俺はなんなのだろうか。

ただの隣の席の会ったばかりの奴に、こんな身の上話をして、何になるのだろうか。

俺だったら、こんなにすぐ自分の過去なんか、他人に話せない。

俺はピツタリとくっ付いている机を、すこしだけ離れた。

ギギーと鈍い音がした。クラスの視線がどれだけ俺に向けられているかが、俺は絶対気にしないだろう。

それより、隣のこいつに腹が立っていた。

もう、うんざりだ。自己満足女も、自分の不甲斐なさも。

キーンコーンと暢気^{のんき}にチャイムが鳴る。

結局、ビリビリのノートには、何ひとつ書かなかった。

黒板の高次方程式など、頭に入るはずがない。

ずっと握っていたシャープペンシルには汗が滲み、俺の指から滑り落ちた。

額からも、冷たい汗が滲み、滑り落ちた。

あの三人への結果報告と共に、“姉の絵”が気になり、彼女のちらりと見えるうなじを、ずっと、見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2841h/>

真夏の海

2010年10月10日19時55分発行